

## 人工種苗放流と資源増殖に関する第1回国際シンポジウム

調査課生物資源研究室長 かえりやま まさひで 帰山 雅秀

ハンザ同盟時代の古いカトリック系教会の礼拝堂の中で、あまりにも有名な地元の作曲家エドワルド・グリークのアニトラの踊りや数々のバロック音楽の子供たちによるリコーダー演奏で幕を開けた「人工種苗放流と資源増殖に関する第1回国際シンポジウム (First International Symposium on Stock Enhancement and Sea Ranching)」は、1997年9月8-11日にノルウェー第2の都市ベルゲンで開催されました。

シンポジウムの目的は、21世紀の人口増加に備えた食糧蛋白資源の確保のために、i) 自然の生態系を維持しつつ、放流された人工種苗をそこに適応させ、如何に漁業資源として利用するか、ii) 放流種苗と野生集団との共存をどのように図るかに集約できるかと思えます。28ヶ国および4国際機関から約180名が参加しました。わが国からの参加者は、ノルウェーに次いで多く20名に達しました。科学委員会の一員として、その責務の一端を果たせたかなとホッとしております。

シンポジウムは、資源増殖の基礎理論(4題)、増殖技術確立のための要因と方法(8題)、増殖効果の評価方法(7題)、資源増殖が自然生態系に及ぼす影響(7題)、増殖資源の管理(3題)、ケース・スタディ(42題)およびポスター・セッション(49題)の7セッションからなり、それぞれ、複数の招待講演、一般講演およびポスター発表が行われました。連日の科学委員会、座長、それに自分の発表と忙しく、時間的にも精神的にも集中して数多くの講演を聞くほどゆとりがありませんでしたが、サケ科魚類の人工孵化放流事業とわが国の栽培漁業を除いて、人工種苗放流は各国ともまだ実験レベルあるいは試験レベルの域を出ておらず、資源論、環境生態学論あるいは経済効果を論議するに至っていないのではないかと感じました。発表内容の詳細は、伊藤(1998)を参照して下さい。

第2回シンポジウムは、4年後日本で開催される予定です。数多くの発表者がわが国からはもちろん、全世界から集まり、21世紀の食糧資源確保に向けた増殖技術の確実な発展が次回シンポジウムでなされることを祈念しています。ベルゲ



ベルゲンの魚マーケット



シンポジウム会場付近のベルゲン市街地

ンへの途上トランジットでロンドンに一泊した9月6日は、丁度“Queen of Heart”のダイアナさんのお葬式の日でした。心から彼女のご冥福を祈ります。終わりに、シンポジウム参加に際し、種々ご高配を賜った水産庁および当センターの関係者各位に深く感謝申し上げます。

### 引用文献

伊藤 進. 1998. 世界の栽培漁業と日本. さいばい 85: 37-40.